

雪をわたつて・・・

第二稿 月のあかるさ

北村
想

登場人物

シロウ

カン子

狐のコンザブロー

狐たち1

2

3

4

5

6

7

8

ケルン博士

ささやく知識の声を聞く。知識もまた感動であることを知る。

○

——むかし、昔のことである。今からおおよそ四十五億年前のことである。太古の原始のころである。

びゅううつと風が吹いたのだ。地球に風が吹いたのだ。太陽から風が吹いたのだ。それで地球の大気という大気はみんな、すべて、宇宙の方に飛んでいってしまった。

地球の重力圏の外に飛んでいってしまったのだ。

それらは水素とヘリウムのガスであつたといわれている。

さてその次に、まだ熱く溶けていた岩石の間から、いろんな気体が飛び出てきた。それらは、水蒸気と二酸化炭素と塩酸ガスと二酸化硫黄と窒素ガスと水素ガスである。

水素ガスは軽いので空の彼方へと逃げていき、水蒸気は液体の水となった。

その液体に塩酸ガスは溶けて、原始の海水ができた。強い塩酸水溶液の海である。大気はまだ二酸化炭素と水蒸気だけであつたらしい。

原始の海水は火山岩である玄武岩と接触して、ナトリウム、カリウム、カルシウム、マグネシウム、アルミニウム、鉄、を溶かし、中和される。

やがて二酸化炭素は中性の海水に溶け始める。

ピーカーに二酸化炭素の気体を満たし、塩酸の水溶液に玄武岩の粉末をくわえてごらん。

水溶液は中和し、二酸化炭素は減少していくはずだ。僕たちは実験室で、太古の海の化学合成を見ることができるのだ。

さて、いまから三十五億年前、緑色植物が生まれたのだが、もちろん大気には酸

素なんてないからオゾンもまた、ない。だから紫外線は容赦なく地球に降ってきていただろう。

DNAを破壊する紫外線から逃れるようにして、おそらくその生命は海に深く、やつと光がとどくところに生まれたに違いない。

さあ、そうすると、そいつらは太陽の光と二酸化炭素から光合成を始めて、酸素ガスを吐き出した。

それまでに、高温と酸性の海に生物らしいものがいたことも分かっている。しかし、酸素ガスを生み出す生物が、突然出現し、前期生物を駆逐したらしいのだ。酸素はまず海水中の鉄と結びつき酸化鉄となって沈澱する。これがいま採掘されている鉄の元だ。

あの山をごらん。鉄鉱石を採掘しているね。あの山はだから昔は海の底にあったんだ。

さて、そうしてやがて、海水の中の鉄分が無くなると、酸素ガスは大気に昇ってオゾンとなり、紫外線を遮断する。紫外線の恐怖から逃れた初期生物はさかんに海で活動を始める。

そうして酸素ガスはどんどん増えて、とうとう、大気は陸上の生物が生存できるものに近づいたのだ。

これは、そうだ、今から四億と二千万年前のことである。――

○

それから四億と二千万年後。劇場は猛烈な吹雪につつまれる。

吹雪の中にふたり、子供の影がある。

シロウとカン子だ。

カン子「兄っちゃ、どこ行くんかあ！」

シロウ「つかまれ。離れるでねど。どこか行ぐんど、聞かねでおけ。兄もそれを知らんねでや。

カン子「ここはどこさ。オラたちはどこさ歩いてるだや。

シロウ「見えね。吹雪で何も見えねし。ただ離れるでね。離れるど、終いぞ。そんだ、きつととつちやんと馬こさ、こつちを通つたにちげえねでな。兄さ覚えてるが間違えねならば、そん道の沿いに岩の祠あつたはずだべ。そごまで行けべしや吹雪さ避けられるがら。きばれ。もちつときばれ。

カン子「もう、歩けねでや。雪こさ強くてオラ歩けねでやあ。

シロウ「歩けねば死ぬど。

カン子「だども、もう足がいぐらきばつても動かねでや。置いていつでええでや。兄さひどりで行くでくろや。カン子はこごでもういいでやあ。

シロウ「馬鹿さ言うでねだ。おめ、ひとり置いて、いかで兄さゆげるか。

カン子「まだや、岩の祠つのはまだや？」

シロウ「見えた。カン子、あれだべ。あそごまで行けば助かるでべし。行ぐんど、きばれや、きばれや。

崖にできた窪みに彼らは避難した。

シロウ「こごなら、でじょうぶだべし。吹雪さおさまるのをまつべ。

カン子「兄ちゃ、オラ眠たぐてすかだねしよ。

シロウ「眠ちゃあし！眠ちゃいげねどカン子。起きるさ。起きてろや。

カン子「兄ちゃ、もう寝かせでくろや。

シロウ「カン子、カン子！眠ちゃあし、眠ちゃあいげねええ！」

吹雪はその岩の祠も視界の外に追いやった。
溶暗

○

真つ白な舞台は堅雪の雪原に見立てられている。
シロウとカン子が元気に端からやつてくる。

シロウ・カン子「堅雪かんこ　しみ雪しんこ　堅雪かんこ　しみ雪しんこ・・・

雪は太陽の輝きを照り返して、ふたりの顔は明るい。

シロウ「すっかり雪が凍っていまあす。大理石のようであす。

カン子「お空は青い石の板のようであす。

シロウ・カン子「堅雪かんこ　しみ雪しんこ　堅雪かんこ　しみ雪しんこ

シロウ「百合の匂いがしまあすか？

カン子「はあい。

シロウ「木はザラメのようであすか？

カン子「はあい。

シロウ「何処へいきますか？

カン子「何処へでもいけまあす。

シロウ「そおであす。

シロウ・カン子「堅雪かんこ　しみ雪しんこ　堅雪かんこ　しみ雪しんこ

シロウ「森だ。森へきたぞ。

カン子「凍ってるね。」

シロウ「つららだ。」

カン子「つらら落ちるとどうなるかな。」

シロウ「つらら落ちると頭にささるぞ。」

カン子「つらら落ちないで。」

シロウ「つらら落ちるなよ。」

カン子「もう、落ちないよ。」

シロウ「狐、呼んでみようか。」

カン子「狐、呼べる？」

シロウ「狐、呼ぶよ。」

シロウ・カン子「堅雪かんこ しみ雪しんこ 狐の子は嫁ほしい嫁ほしい！」

しばらくシンとして、やがて森の木々の凍った枝が震える音が聞こえてきた。シャ
ララアんと、粉硝子のような音だ。

シロウ・カン子「堅雪かんこ しみ雪しんこ 狐の子は嫁ほしい嫁ほしい！」

同じように音がする。シロウとカン子、ふたり手をたたいた。
と、森の中から声がする。

声「凍み雪しんしん 堅雪かんかん・・・」

ふたり見ると、森から飛行服を来た男の人がひとり、出てきた。

男「凍み雪しんしん 堅雪かんかん・・

シロウ・カン子」？

男「こんにちは、私は狐のコンザブローです。

シロウ・カン子」？？？・・・

なるほどよく見ると尻尾がある。それに飛行服から出ている手は狐のそれだ。
ああ、耳だつて、そうだ。でも、帽子も眼鏡もマフラーもまるで飛行士なのだ。

コンザブロー「凍み雪しんしん 堅雪かんかん。私は狐のコンザブロー。

シロウ「狐こんこん白狐 お嫁ほしけりやとつてやろ

コンザブロー「シロウはしんこ カン子はかんこ おらはお嫁はいらないよ

シロウ「狐こんこん 狐の子 お嫁がいらないぎや餅やろか

コンザブロー「シロウはしんこ カン子はかんこ 黍（きび）の団子をおれやろか

カン子「狐こんこん狐の子 狐の団子は 兎（うさ）のくそ

コンザブロー「いえいえ、けしてそんなことはありません。あなたがたのような立派な利口なかが、うさぎのふんなんか召し上がるわけがありません。ほんとにほんとうの黍の団子ですとも。

カン子「でも、狐つて人を化かして、兎やら馬やら牛の糞を食べさせるつて。

コンザブロー「そんなことはほんとうはないのです。それはむじつの罪というやつです。

私たちは全体いままで、人をだましたことはありません。

シロウ「そいじゃあ、狐が人をだますつて、嘘なのかい？

コンザブロー「ええ。

カン子「化かさないの？

コンザブロー「ええ。狐が人を化かすということは嘘です。けだし最もひどいのです。

だまされたという人は大抵がお酒に酔っぱらったり、臆病でくるくるしたりした人です。シロウ「でもコンザブローさん、へんな格好しているねえ。それは飛行機に乗る人の服じゃないのかい？

コンザブロー「そうです。変ですか。

シロウ「やつぱり化かすんじゃないのかい。

コンザブロー「いえいえ、これは私どもの少年学校の制服なのです。私どもは学校にいるときはこういう格好をしているのです。

カン子「狐に学校、あるの？

シロウ「聞いたことないなあ。

コンザブロー「狐、学校に行っちゃあいけませんか。

シロウ「いけないことはないけれど。

コンザブロー「それではシロウさんカン子さん、今度私たちの学校祭においでなさい。幻燈やら芝居やら科学の特別授業やらやりますから、きつといらつしやい。この次の雪の凍った月夜の晩です。七時から始めます。ほら、入場券をあげましょう。何枚要りますか？シロウ「それじゃあ、五枚おくれ。

コンザブロー「五枚というと、あなた方二枚と、あと三枚はどなたですか？

シロウ「兄さんが三人いるんだ。

コンザブロー「兄さんは十二歳以下ですか？

シロウ「いや、みんな十二より上だよ。

コンザブロー「それは残念です。十二より上は駄目です。兄さんの分は差し上げられません。カン子「どうして駄目なの？

コンザブロー「十二より上は駄目なんです。あなた方だけいらつしやい。特別席をとっておきますから。（チケットを渡した）面白いですよ。

カン子「面白そうだね。

シロウ「狐少年学校学校祭か。・・・」

コンザブロー「そのときは、黍の団子をおあがりなさい。ちゃんと私が畑を作って、播いて草をとって刈って叩いて粉にして練って蒸して、お砂糖をかけたものです。

シロウ「うん、そうするよ。」

コンザブロー「それでは雪が柔らかになるといけませんから、もうお帰りなさい。私ももう帰ります。キックキックキックキック、トントントン。さようなら。

シロウ・カン子「さようなら。」

コンザブロー「堅雪かんこ 凍み雪しんこ キックキックキックキック、トントントン。シロウ・カン子「堅雪かんこ 凍み雪しんこ キックキックキックキック、トントントン。

コンザブローの姿が雪原の向こうの森の中に消えていった。

シロウ「(チケットを読む) 狐少年学校学校祭特別入場券。

コンザブローが去った森の方へふたり、振り向いた。
森はシンとして、細かな雪の光でキラキラしている。



その森の奥ふかく、雪の広場に水気耕栽培の巨きなトマトの木があった。その辺りが狐の少年学校だ。

月は空に高くのぼった。森は青白い空気で包まれた。

狐少年学校の生徒たちが集まってきて、狐1、2、3は芝居の準備をしはじめる。狐4と5と8は幻燈の準備をし、狐6は司会らしい。プログラムを見ている。狐7は受付だ。

シロウとカン子が出来てきた。シロウは絵本を、カン子は鏡餅をそれぞれ風呂敷にくるんで持っている。

狐7「こんばんわ。お早うございます。今まだ準備をしておりますが、入場券はお持ちですか？

シロウ「はい。持っています。(差し出した)

狐7「ふむふむ・・・さあ、それではこちらへどうぞ。これは特等席の切符です。

狐たちはみな席についた。

シロウとカン子も用意された特別席に座った。

と、コンザブローがタキシードなんか着て現れた。

コンザブロー「(シロウとカン子に)こんばんわ。ようこそ。

シロウ「このあいだは失敬。それから、今夜はどうもありがとう。

コンザブロー「よくここが分かりましたね。ここが狐少年学校です。ここだけではありません。私どもの狐少年学校はこの森すべてです。この森で起きることすべてが私どもの学校の授業です。

カン子「お土産にお餅を持ってきました。どうか、みなさんに召し上がってください。コンザブロー「これはどうも。お気をつかせてすみません。どうか、ごゆっくりなすつて下さい。もうすぐお芝居やら幻燈やら始まります。

シロウ「コンザブローさんはこの狐少年学校の先生なんですか？

コンザブロー「そうです。そのようなものです。でも、人の社会とは違って、ここでは私も生徒です。私も森羅万象の一人の生徒です。(狐たちに)みなさん、人のシロウさんとカン子さんからお餅をいただきました。

狐たち「(拍手)

コンザブロー「さあ、お座りになってください。

シロウとカン子、再び座った。

コンザブロー「(台に上がって一礼すると) オホン。狐少年学校のみなさん。それから人のシロウさんとカン子さん。こんばんわ。今夜はたいそう美しい天気です。お月さまは真珠か銀のお皿です。お星さまは野原の露のキラキラした結晶です。空気はオゾンがたっぷりと静謐です。ただいまから狐少年学校の学校祭をはじめます。

狐たち拍手。シロウとカン子も拍手。

コンザブロー「今夜はもう一人、みなさんにはたいへんステキなお客さまがあります。その方を紹介します。狐少年学校の特別講師、ルンパランパ・ケルルン博士です。

ケルルン博士が登場した。背の高い、キリンのような顔をした女の博士だ。狐たち拍手。

シロウとカン子も拍手。ケルルン博士は軽く会釈すると、シロウとカン子の隣に座った。

ケルルン博士「(シロウとカン子に) こんばんわ。ルンパランパ・ケルルンです。

シロウ「シロウです。

カン子「カン子です。

それぞれ握手した。

狐6が台の上に立った。

狐6「みなさん、おはようございます。こんばんわ。僕が司会を担当します狐のコン平です。よろしくおねがいします。

拍手

狐6「では狐少年学校のみなさん、今宵最初のレパトリーは、幻燈とお芝居です。宮澤賢治という偉い人の作品を北村想という変な人が脚色いたしました『注文の多い料理店』演じますのは、狐のコン吉（狐1）、コン助（狐2）、コン太（狐3）の三名です。

狐1、2、3がそれぞれの役の扮装をして出てきた。

狐1はウエイターのような格好。2はラーメン屋のような格好。3は英国の金持ちのような格好である。どうしてそういう格好をしているのかは、後で分かる。（：分らないかも知れない）

幻燈が『注文の多い料理店』とタイトルを映し、キャストを映し出した。それによると、『きやすと 金持ち——コン太 召使——コン吉 奴隸——コン助』となっている。

狐3「ああ、わしは金持ちなんだけど、金持ちというのは、どうも退屈でいかな。金にまかせていろいろな遊びをやって、もうやり飽きてしまったな。おい、召使。

狐1「はい、旦那さま御用でしょうか。

狐3「うん、お前はな、お前は犬だ。

狐1 「え？」

狐3 「お前は今日から犬をやれ。」

狐1 「なんです？」

狐3 「そりゃお前、退屈だからだ。なんか、文句あるのか？」

狐1 「いえ、めつそうもございません。私は犬です。犬でございます。」

狐3 「よし、ないてみる。」

狐1 「ワンワン。」

狐3 「よしよし、なかなか元気のいい犬だな。よしよし、それじゃあ（と、靴をぬいで）これを投げるから、拾って帰ってこい。（投げる）

狐1 「はい。ワンワン。（拾ってもどつてくる）」

狐3 「こら、お前は何だ！」

狐1 「はい、私めは犬でございますが。」

狐3 「犬が靴を手で持つてくるのか、ん？」

狐1 「ああ、そうでございました。」

狐3 「口でくわえてもどつてこんか。それ、もう一度やるから、しつかりやれよ。」

狐1 「はい。ワンワン。」

狐3 「（投げる）」

狐1 「ワンワン。（くわえてもどつてくる）」

狐3 「よしよしなかなか利口な犬だ。褒美に首輪をしてやろう。（首輪をする）」

狐1 「ワンワン。」

狐3 「お座り。おまわり。チンチン。おしっこ。おたんちん。えんがちよ。（などとひとしきり芸をやらせる）どうだ犬としての人生もいいもんだろ。」

狐1 「ええもう、マイ・ライフ・アズ・ア・ドッグです。」

狐3 「うーん、しかし、飽きたな。わしはなんでもすぐに飽きるからな。おーい、奴隷！」

狐2 「はい。旦那さま。ここにおります。

狐3 「おお、そこにいたか。ところでお前は今日は奴隷ではない。今まで、鞭で撃ったり、棒でぶったり、竹でつついたり、縄で縛ったり、浣腸したり、コーラだといって醬油を飲ませたり、唐辛子を尻に突っ込んだり、毛をむしったり、鼻やら耳に穴をあけたり、腹を蹴ったり、いろいろしたことは悪かった。今日はな、立場を変えてみよう。わしが奴隷をやるから、お前はわしをやれ。どうじゃ。

狐2 「え、そうしますと、今日は私が旦那さまですか？

狐3 「そうだ。わしは奴隷だ。

狐2 「どうしてでがす？

狐3 「ま、退屈したんで気まぐれだ。

狐2 「そうですか。私はきょうは奴隷ではないんですね。

狐3 「そうだ。お前はわしだ。どうだ面白いだろ。

狐2 「それでは、おい奴隷！

狐3 「なんだ！（威張る）

狐1・2 「へへい。（遜る）

狐2 「いけませんよ。奴隷がそんなにえぼっちゃ。

狐3 「いやあすまんすまん。いつものくせがなかなかぬけんもんでな。ゆるせよ。

狐2 「おい奴隷！

狐3 「へへい。・・・こんなもんでどうかな。

狐2 「いいですね。

狐3 「へへい。

狐2 「おい奴隷、こうしてやるこうしてやる。（鞭を出してきて打つ）

狐3 「うおっうおっ・・・

狐2 「おい奴隷、こうしてやるこうしてやる。

狐3「(怒る) まてこら!痛いぞ。

狐2「何を言うか。わしは御主人だぞ。(なおも今度は蹴る)

狐3「待て!やめた。奴隷ごっこやめた。

狐2「もうやめるんですか。

狐3「もう飽きた。

狐2「ほんとにもう、わがままなんだから。

狐3「よし、その代わり(とゴムを出してきて)これをくわえろ。

狐2「これをくわえるんですか。

狐3「そうだ。そうしてわしからうんと離れろ。そうするとゴムが伸びるだろ。

狐2「ふあい。

ゴムがいつぱい伸びたところで狐3はゴムを離した。当然ゴムのパンチが狐2の顔を打つ。

狐2「ぎゃっ。

狐3「よし犬、次はお前の番だ。

犬も同様のことをされる。

狐3「わしはな、お前たちが憎くてこんなことをしているんじゃないぞ。いいか、これは愛だ。

狐2「こんな痛いものが愛ですか。

狐3「そうだ。愛は痛いんだ。よし、こんどはお前たち二人が愛しあえ。お前ら互いにこのゴムの端っこをくわえろ。

狐1・2「うへ。」

狐3「早くやれ。」

狐1・2「（そうする）」

狐3「そうやってうんと離れろ。」

狐1・2「ふあい。」

狐3「いっぱい伸びたところで、どっちでも好きな方が口を開けてそれを離せ。もし相手に対して愛があるならば、なかなか離せるものじゃない。どうじゃこれは愛の試練だ。」

狐2「（離す）」

狐1「ぎゃっ。」

狐3「さすが奴隷だ。愛がない。」

狐2「私しや犬なんざ愛しちやいせんよ。」

狐3「よいか、この教訓を覚えておけ。愛したほうがいつも傷つくのだ。さて、愛にも飽きたな、よし、次はお互いの髪の毛に火をつける。」

狐2「できませんよ、そんなこと。」

狐3「嫌なのか。いやなら、殺すぞ。おい、犬の召使、鉄砲持ってこい。」

狐1「ワンワン。（鉄砲とりに去る）」

狐2「すいません。やります、やりますから、命ばかりは。」

狐1「ワンワン。（鉄砲をもってきた）」

狐3「いや、もういい。お前の髪の毛に火をつけるのは、飽きた。飽きたから、よし、これから狐でも撃ちに行こう。森へいくぞ。森へ行つて狐やら鳥やらリスやらマングースやら、なんでもいいからこの鉄砲でぶつ殺そう。」

狐2「そうですね。それが面白いですよ、きつと。はい。森へいきましよう。森へ行つて狐やら象やらもう、何でもかんでもぶち殺しましよう、はい。」

狐1「ワンワン。」

幻燈に『森』という文字。

森にやつてきたらしい三人。

狐3 「いやあ、何だいいたい。せつかく森へ来たというのに、ぜんたいどうもけしからんじゃないか。鳥も狐も一匹もいないじゃないか。何でもいいから早いところいつでズダーンとやりたいのに、つまらんな。

狐2 「そうでございますね。まったくけしからんですね。そいつで鹿の黄色い横つ腹なんぞに二、三発お見舞い申したら、もう愉快でしょうね。鹿なんかくるくるまわって倒れますですよ。

狐3 「代わりに奴隸、お前でも撃とうか。

狐2 「めつそうもございせんです。きつとこうなつたのも、召使の犬の働きが悪いからですぜきつと。

狐3 「そうだな。じゃあ、犬を殺すか。

狐1 「ワンワン。冗談じゃありません旦那さま。

狐3 「そんなら早いところ、狐をさがしてこい。わしはもう腹が減つたぞ。ああ、こいつで早くズドドンといきたいなあ。

狐1 「早くとは言いまして、私も今日初めて犬になつたもんですから、なかなか鼻がききませんで。

狐3 「わしは腹が減つたぞ。どこかに飯を食わせるところはないのか。

「ごおおつという風の声。

狐3 「なんだあれは？

狐1「そのようです。ワンワン。

狐3「最近は森も開けてきたじゃないか。こんなところにレストランか。これもみな、我々のような人種が、野蛮な連中を教育したおかげだぞ。な。

狐2「さいでござます。

幻燈の文字。

+

—どなたもおはいいりください。

—決してご遠慮はありません。

+

狐3「これはどういう意味かな。

狐1「ただで食わせてくれるんでしょうか。ワン。

ドアを開けた。

幻燈の文字。

+

—ことに肥ったお方や若いお方は、大

—歓迎いたします。

+

狐3「ほほう。そうすると我々は大歓迎されるわけだな。

狐2「肥ってますし、若いですしね。

狐1「しかし、妙な家ですね。さつきから戸ばかりいっぱいありますよ。ワンワン。

狐3 「これはな、ロシア式なんだ。ロシアでは寒いからみんなこうなんだ。お前らは学も金もないから知らんだろうが。」

ドアを開けた。

幻燈の文字。

＋
— 当軒は注文の多い料理店ですからど
— うかそこは御承知ください。
＋

狐1 「繁盛してるんですね。ワン。」

狐3 「こういうところの料理屋が今時は流行るんだ。」

ドアを開けた。

幻燈の文字。

＋
— 注文はずいぶん多いでしょうがどう
— かいちいちこらえてください。
＋

狐3 「これはぜんたいどういうことかな？」

狐1 「これはあれですよ、旦那さま。注文する客が多いんで、したくが手間取るけれどもごめんくださいと、いうことですよ。」

狐3 「そうかそうか。よしよし。しかし、部屋はまだかな。」

狐2 「ドアばかりですね。

狐3 「わしは早いとこ座りたいんだがな。

ドアを開けた。

幻燈の文字。

＋
— お客さまがた、ここで髪をきちんと
— して、それからはきものの泥を落と
— してください。
＋

そうした。

幻燈の文字。

＋
— 鉄砲と弾丸をここに置いてください
—
＋

そうした。

幻燈の文字。

＋
— どうか帽子と外套と靴をおとりくだ
— さい。
＋

そうした。
幻燈の文字。

＋
― ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡
― 財布、その他金物類、ことにとがつ
― たものは、みんなここに置いてくだ
― さい。

そうした。
幻燈の文字。

＋
― 一ここで衣類をお脱ぎください。
―

狐3 「何、着ているものを脱げというのか？

狐1 「御飯の前にシャワーでも浴びるんじゃないでしょうかね。ワン。

狐3 「おお、そうだ、そうだ。今の時代はなんでもシャワーだ。

狐2 「旦那さまここにバスタオルがございました。

狐3 「おお、そうか、そうか。

着ているものを脱いで、バスタオル一枚になる。

幻燈の文字。

一箱の中の白い粉を身体にまんべんな
一く、ぞんぶんにまぶしてください。一

狐3 「これはどういうことかな？

狐2 「旦那さまここにそれらしき箱がございます。

狐1 「これはきつと新しい石鹼か何かでしようきつと。

狐2 「旦那さま。おまぶしもうしあげます。

狐3 「よしよし。お前らも互いにまぶしあえ。

お互いにまぶしあう。

真つ白になる。

幻燈に文字。

一いろいろ注文が多くてうるさかった
一でしょう。お気の毒でした。もうこ
一れだけです。どうかからだじゅうに
一塩と胡椒をよくもみこんでください

狐3 「うーん、これは変だぞ。

狐1 「変ですね。

狐2 「変ですね。

狐3 「ふつう、注文というのはこちらからするものなのに。これじゃあ、まるで我々が食われるようじゃないか。

狐1 「そうかも知れませんか。

狐2 「わたしたち、食われちゃうんですか？

狐3 「うーん、これはどうやら逃げた方がよさそうだな。こりゃあ、きっと狐に化かされたんだ。

と、唸り声がする。

狐1 「狐じゃないですね、あの声は。

狐3 「あつそうか。この店の名前からすると、ありや山猫だ。

狐2 「そうすると私たち、山猫に食われるんですか？

狐3 「そうだな。わつはつは。山猫に食われるんだ。

狐2 「どうしましょう。

狐3 「観念するしかないな。しかし、わしは金持ちに生まれて、好き放題に暮らしてきて、もう思い残すことはない。お前らはどうじゃ？

狐1 「私はもう犬ですからワンワンですよ。

狐2 「私も奴隷に生まれて、好き放題にされてきましたから、もうどうなってもあんまり変わりません。

狐3 「山猫のやつ、今日は満腹じゃな。わつはつは。

狐1 「ワンワン。

狐2 「へい、らつしやい！

三人、やつぱり肩よせあつて自棄糞で笑う。
幻燈の文字。

＋　　　　　　＋
— おしまい —
＋　　　　　　＋

演じた三人がお辞儀する。

拍手。

三人は仏頂面してそこに立つて残っている。

司会の狐6が登場。

狐6 「宮澤賢治さんの原作で北村想の脚色による『注文の多い料理店』でした。演じた役者を紹介します。コン吉、コン助、コン太。・・・ではこれから感想会を始めます。何か意見や感想のある人はどうぞ。

狐7が手を挙げた。

狐6 「はいコンマルさん。

狐7 「コンマルです。ちよつと聞いていいですか？

狐6 「誰に質問ですか？

狐5 「えつと、誰でもいいんですけど出演した人にです。

狐6 「はいどうぞ。

狐5 「このお芝居の、テーマは何ですか？

狐6 「(出演者に) 誰か、答えてください。

狐1、2、3顔を見合わせて牽制しあっているが。

狐1「えつと、これはその、もう死んじやったある偉い人間が言った『人生というのは単純なものである。人がおそれるのは畢竟一切が徒勞に帰するのではないかということであるが、人生においては、あらゆる出来事が偶発的な贈与、インシデンタル・ギフトにすぎない』という言葉を受けて、そのインシデンタル・ギフトな部分をデフォルメして表現してみたものです。

狐6「だそうです。

狐5「イロモノ役者は所詮いろいろものだというのがテーマじゃないんですか？

狐1「それはごく少数の反革命暴乱分子によるデマです。

狐6「他に？

狐8が手を挙げた。

狐8「えつとお、質問なんですがあ、コン助さんの役の奴隷があ、なんでえ、ラーメン屋のお、服というか衣装というかあ、着てえ、いるんですか？

「そうだ、そうだ」とざわつく客席。してやったりという顔の狐8。

狐8「どうしてですか？

狐2「えつとお、これはあ、北海道にいった時い、そのお、ある場所のお、狸公路というところなんですがあ、名前は言えませんが、有名なあ、ラーメン屋にい、奴隷のような店員がおったもんでえ、そうしました。

狐8 「そんなことは、見ている人には分からないと思います。（ちよつと憤ったふう）

狐2 「それでも、これはあ、脚色のほうでえ、そうなつとつたもんでえ、・・・

狐8 「そうしたらあ、たとえばあ、脚色のほうでえ、なんかあ、お化けみたいなあ、衣装とか指定があれば着るんですか？

狐2 「まあ、着ます。

狐8 「そういうのつて、主体性がないと思います。

狐1、2、3 顔を見合わせて・・・

狐3 「今度から、もつとシタイ性のあるのにしたいと思います。（ふてた）

狐6 「他には・・・ではもう一度彼らに拍手を。

狐たち拍手。

狐6 「さて次は、他に出来ることもないので、結局お芝居をごらんにいれます。これは宮沢賢治さんの作品とは何の関係ありません。ですから賢治ファンの方、また演劇評論家の方はこのパートは小便したり居眠りしたりして下さって結構です。戯曲をお読みの方はここはとぼしてお読みください。毎度おなじみになりました不良劇作家北村想が身のほども省みず、「おい、姉ちゃんデートしようぜ」なんて声かけた女にフラれたはらいせに、てめえが悪いくせに世をすねて、ヤケクソで作りました迷惑千万なパフォーマンス、題しまして『ドクター・ハリケーン！』演じますは、私コン平、コンコ、コンマル、そしてコンザブロー先生、さらに再びコン太の五名です。

五名、それぞれの格好で登場。シロウたち、拍手。

と、電話のベル。狐5が電話を持って走ってくる。

狐5「えらいこつてす。作者から電話です。

狐6「(受話器を取って) はいもしもしこちら狐少年学校の学校祭です。

電話の声「・・・もしもし作者の北村想だ。俺の芝居をやるのはいいが、あんまり余計なこと言うんじゃないねえ。

狐6「だって、今度いい役つけてやるからデートしようぜって、研究生に次々手をつけてるって評判じゃないですか。

電話の声「バカヤロ、そんなこと大きな声で言うな。

狐6「おてんと様はお見通しです。

電話の声「下半身に人格なんてない。

狐6「上半身にも人格ないじゃないですか。

電話の声「まあそう言われりゃそうだけど。頼むぜ、俺のイメージ落とさないでくれよ。節操がないって顰蹙(ひんしゆく)かかってるんだ。このうえ人格破綻者の烙印押されてみる、俺の作家生命はどうなる。

狐6「そんなこと知るもんか。(電話切る)・・・大変お見苦しいところをお目にかけて申しわけありません。それでは、ごらんください。人格破綻作家北村想作、『ドクター・ハリケーン 俺たちに意味はない、の巻』

登場人物

すさんだ医者——狐3のコン太

なんだっけ医者——コンザブロー

謎のしゅりけん婆(看護婦)——狐8のコンコ

イオーク少年——狐7のコンマル

暗転の中にナレーションが入る。

ナレーション「大都会・二十四時間眠ることを知らない資本主義の帝国・そこに蠢く生きとし生けるものの全ての命を預かり、日夜また眠ることを許されぬ愛の戦士。万民曉に眠るときも起きている、正義の味方。ヒューマニズムの旗の下、粉骨碎身の努力を続ける真の勇者。それがこのホスピタルのドクターだ。そして私こそはそのホスピタルの近所に住んでいるすさんだ医者だ！！

ババーン！音楽がババーンときて舞台が明るくなると医者が立っている。
米俵かついだ医者が。

医者「おらじゃねえだよ。おらすさんだ医者じゃねえだよ。おらはなんだつけ医者だよ。まちげえねえでくんろ。

すさんだ医者「それは私だ。すさんだ医者は私だ。

と言いつつ、もう一人医者が出てくる。

すさんだ医者「お前は何だ？

なんだつけ医者「おら、なんだつけ？

すさんだ医者「お前も医者のはしくれなら、米屋のアルバイトはもうやめろ。

なんだつけ医者「あ、そうだ。おら、配達があるだよ。

すさんだ医者「近所の大病院は毎日手術をして潤っているというのに、何故だ。何故、こ

こには患者が来ない。医者がどうして米屋のバイトをしなければ食っていけないんだ。なんだっけ医者「だども、おら、おら、なんだっけ？

すさんだ医者「くそ、患者が来ないなら、酒を飲むぞ。アルコールに溺れるぞ。人生を怨むぞ。絶望してやるぞ。屁こくぞ。

と、婆の看護婦が出た。

看護婦「ドクター。（と、しゅりけんを投げる）

すさんだ医者「それをカルテで受け止めて」投げるな。お前は看護婦のくせになんできゅりけんを投げるんだ。

看護婦「なんでなら、私はしゅりけん婆だからだ。私は謎のしゅりけん婆だ。

すさんだ医者「そういうことは誰が決めた？

しゅりけん婆「自分のことは自分で決めた。（またしゅりけんを投げる）

すさんだ医者「投げるな、ばかやろ。あたったら血が出るじゃないか。死ぬぞ俺は。人生の敗残者になつてやるぞ。

しゅりけん婆「ドクター、患者が来たよ。

すさんだ医者「何、患者が！おお。

なんだっけ医者「どうする、逃げるべか。

すさんだ医者「何で逃げるんだ。首つるぞ俺は。

なんだっけ医者「おら、配達があるで。

すさんだ医者「米屋はやめろ。．．おい、しゅりけん婆、患者を呼べ。

しゅりけん婆「あいよ。患者さんどうぞぞ。

イオークのような少年が入ってきた。

すさんだ医者「なんだまたこいつか、いつも用事もないのにやつてくるイオーク少年じゃないか。」

しゅりけん婆「どうしましょう？」

すさんだ医者「歩かせておけ。ああ、俺はもう毒を飲もう。」

しゅりけん婆「ドクター。」

すさんだ医者「何だ。」

しゅりけん婆「もう一人、患者がいるよ。」

すさんだ医者「何！」

なんだっけ医者「おら、配達にいかねえとしかられるだよ。」

すさんだ医者「米屋をやめろお前は。・・よし、しゅりけん婆、患者を呼べ。」

しゅりけん婆「患者、来い。」

乙女が入ってきた。

おとめ「あのお。」

すさんだ医者「分かりました。はっきり言いましょう、あなたは病氣ですね。」

おとめ「はい。」

すさんだ医者「お掛けなさい。」

おとめ「はい。（座った）

すさんだ医者「さあ、氣を楽にして。あなたが病氣だと何故分かったか、御説明しなさい。うか。」

おとめ「はい。」

すさんだ医者「ここは病院だからです。病院には病氣の人しか来ません。もちろん、病氣

でない人も来ますが、あなたは患者です。患者というのは概ね病気です。よろしいですか。これを循環理論の医学的展開といいます。

おとめ「私、病気です。

すさんだ医者「ええ、あなたは病気です。

なんだっけ医者「おらは米屋だ。

すさんだ医者「違う！お前は医者だ。医者としての自覚を持つんだ。

なんだっけ医者「おら、自覚は持つてねえが、米俵なら持つてるだよ。

しゅりけん婆「私はしゅりけん婆！（しゅりけんを投げる）

すさんだ医者「（それをカルテで叩き落として）驚かして申し訳ありません。ここにはア

イデンテティの歪んだやつ、つまり早い話がアホしかいません。だから、安心です。

アホは安全です。恐いのは賢いやつです。従ってここは安心です。これを循環理論の

瞬間湯沸かしといいます。

おとめ「あの、私の病気というのは、

すさんだ医者「おい、しゅりけん婆、この患者のカルテをよこせ。（受け取った）さあ、どうぞ。

私どもの医学は臨床実験医学ではなく、原理的な問診を主体にしています。心行くま

でお話下さい。

おとめ「はい。私、何の病気なのでしょう？

すさんだ医者「・・・

息を飲む沈黙・・・

なんだっけ医者「おら、米屋行くだ！

しゅりけん婆「しゅりけん婆！（と言いつつしゅりけんを投げる）

すさんだ医者「・・・大丈夫。患者には自分の病気が何だか分からない。これは当たり前

のことです。それを突き止めるのが医者の仕事です。何か自覚症状はありますか？

おとめ「それが、あまりないんですが、何となく病氣だとは思うんです。

すさんだ医者「よろしい。自分の身体は自分が一番よく知っています。なんとなく、これが大切です。なんとなく病氣は始まってなんとなく人は死ぬのです。では、ひとつ検査をしましょう。いいですか。

おとめ「はい。

すさんだ医者「歌ってみてください。

おとめ「歌？

すさんだ医者「私のあとについて歌いなさい。ゝむかしむかし

おとめ「ゝ毛がはえた。

すさんだ医者「ゝ助けた亀に

おとめ「ゝ毛がはえた

すさんだ医者「ゝ龍宮城に

おとめ「ゝ毛がはえた

すさんだ医者「ゝ絵にもかけない

おとめ「ゝ毛がはえた

すさんだ医者「ゝおとひめさまの

おとめ「ゝ毛がはえた

すさんだ医者「ゝたいや平目の

おとめ「ゝ毛がはえた

すさんだ医者「ゝただ珍しく

おとめ「ゝ毛がはえた

すさんだ医者「ゝ月日がたつのも

おとめ「ゝ毛がはえた。

すさんだ医者「分かりました。あなたの病気は不治の病です。

おとめ「え、不治の？

すさんだ医者「そうです。

おとめ「もう治らないんですか？

すさんだ医者「大丈夫です。心配ありません。どんと私に任せなさい。毎日毎日ここで手術をすればそのうち治ります。

おとめ「シリツですか。

すさんだ医者「そうです。おいしゆりけん婆、手術の準備だ。なんだっけ医者、お前も手伝うんだ。

なんだっけ医者「だども、おら、精米があるだで。

しゆりけん婆「昨日から電気もガスも止められていますから、手術はできません。

すさんだ医者「けつ、電気がなんだ！ガスがなんだ！精米が何だ！この世が何だ！

おとめ「私、帰ります。

すさんだ医者「何故ですか？

おとめ「私、シリツ嫌いだから。

すさんだ医者「好き嫌いを言うんじゃない！（おとめの頬を打つ）

おとめ「あつ。（崩れる）

すさんだ医者「行くも地獄、帰るも地獄なんだあ！

おとめ「ゆくもじごく、蛙も地獄。みみずもカエルもみなごめん。・・・

すさんだ医者「分かってくれましたね。

おとめとすさんだ医者、抱き合う。しゆりけん婆となんだっけ医者も抱き合う。

ナレーション「こうして今日もまた、すさんだ医者のごりおしと頑迷なる思い込みによつ

て、一人のいたいけな少女の命が絶望の淵から救われたのである。行け！すさんだ医者、お前には明日はない！

合唱　俺たちに明日はない

金もない　知恵もない

ここまできたら　後もないさ

ああああ　何にもないさ

俺たちに意味はない

羽根もない　夢もない

ここまできたら　しょうがないさ

ああああ　何にもないさ

狐6「司会にもどつて」どうもありがとうございました。『ドクター・ハリケーン』でした。

シロウ「きたいなお芝居だったね。

カン子「あんなの誰だってできるね。

狐6「（というカン子の言葉を耳にして）では、ここで、人のカン子さんが何かやってくれるそうです。

狐たち拍手。

カン子「ええ？！

シロウ「ばかだな。あんなこと言うからだぞ。あの司会の狐、怒っちゃったんだ。

カン子「いいよ。あんなのでいいのならカン子にだって出来るよ。

狐6「人のカン子さん、何をやってくれますか？

カン子「(立って)では、道徳のお話をします。

シロウ「おいおいカン子、そんなの出来るのか？

カン子「簡単だよ。このあいだ学校で先生がしてくれた話をするだけだもん。

カン子、演壇まで出てきた。

カン子「それで狐のみなさん、これからもつと意味のある、ありがたいお話をお願いします。これは人の小学校で先生がしてくれる道徳というお話です。その中で、今夜は『宝の茶碗』という話をします。えーと、むかしむかし、あるところに、王様が、えーと、強い、そのこわい、えーと言うことをきかないと恐ろしい王様がおりました。油断していると『よう彼女、デートしようぜ』なんて可愛い娘を誘ったりするのです。この王様は、宝物を集めるのが好きでした。それで、いろいろ宝物をあつめていたのですが、もういっぱい集めて、なんでもあるので、もう、ほんとうにいっぱい宝物を持っていたんですが、中でも宝の茶碗を大切にしていたのです。ある日のこと、王様が宝の茶碗を見ますと、どうしたことか茶碗がわれておりました。王様はたいそう腹をたてて、国中の焼き物師をあつめて、その宝の茶碗をもとにもどすように命じました。一年以内にもとにもどさないと、みんなの首をはねると申し渡しました。焼き物師たちは大慌てで茶碗をもとにもどそうとしましたが、宝の茶碗はそう簡単にはもとにもどりません。そこで村のはずれに住んでいる、茶碗づくりの名人のところに行きました。しかし、名人はみんなの申し出をことわったのです。それから一年たちました。王様はいよいよみんなの首を切ろうとしました。すると若者が、もう少し待ってください、おねがいしますと言ったのです。この若者は『よう彼女デートしようぜ』なんてけして言わない軽薄ではない、かつこい若者でした。それでもう一度茶碗つ

くりの名人のところにいったら、もう名人は死んでいたのです。名人には娘がおりました。この娘は軽々しく男の後についていくような娘ではありませんでした。真実の愛を求めて、その愛の深さゆえ傷つく可憐な乙女で、けして玉の輿にのろうなどという不埒なことは考えていませんでした。若者は娘と二人で窯をさがしますと、なんとあの宝の茶碗が出てきたのでした。王様は自分が悪かったと思いました。若者と娘は結婚して子供に恵まれ幸せになりましたとき。（お辞儀する）

狐たちそれぞれズッコケた。

カン子「なんなんだよお。

狐6「あの、今の話は、ようするにどういう話なんですか？

カン子「だからあ、愛情は・・・尊いという・・・

狐6「ではケルルン博士に感想を聞いてみましょう。

ケルルン博士「コンザブローさん、ちよつと。

コンザブロー「はい。

ケルルン博士「私の耳をつまんでください。

コンザブロー「はい。（そうした）

狐6「ケルルン博士、感想は？

ケルルン博士「ですから、このとおり、狐につままれたようだという事です。

狐6「だそうです。カン子さん、今の話は何の話なんでしょう？

カン子「だから、今の話がいったい何の話なのかを話し合うのが、人の学校の道德という

おペンキヨーなのです。

狐6「ほんとにそうなのかなあ・・・

カン子「だって、先生がこのあいだ、話してくれたんだもん。

コンザブロー「みなさん、人の世界は難しいので、きっと今のカン子さんの話も通ずるのでしょう。

狐たち笑う。嘲笑だ。

カン子「ウエーン、お兄ちゃん・・・

シロウ「ばかだな。

狐6「人のシロウさん、代わりに何かありますか？

カン子「お兄ちゃん・・・

シロウ「じゃあ、僕が、やります。

狐6「人のシロウさんどうぞ。

シロウ「僕は、このあいだ読んだ童話のお芝居をやります。狐少年学校にはセロという楽器はあるでしょうか。あつたら貸してください。

セロがきた。

シロウ「カン子、このあいだお兄ちゃんが話してやつたら、あれをやるから、お前も一緒に手伝いな。

カン子「ああ、あれね。よしてきた。

シロウ「あるときある村のはずれの水車小屋にセロ弾きの男が住んでおりました。男は毎夜毎晩一生懸命セロを練習しておりました。なにしろ楽団ではいつも楽長さんに注意されるからです。早く上手になりたい一心で、男は夜中ずっと、月の明かりの中でセロを弾いていたのです。男は名をゴーシュと申しました。

シロウ、セロを弾く。

カン子が燕のように飛んでくる。

カン子「ブーン、やれやれ、みんなに出遅れてしまった。みんなもうエジプトに向かったろうな。おやおや、雨だ。こんなときに、ついてないな雨だなんて。どれ、どこかに雨宿りできる場所はないだろうか。あ、あの小屋がいい。あそこにしよう。ぶーん。

シロウ、セロがうまく弾けないので、ふてくされて水をがぶがぶ飲む。
カン子の燕が飛んできた。

カン子「今晚は、今晚は。トントン。ちょっと雨宿りさせてください。

シロウ「だれだ、夜中にドアなんぞ叩くやつは？ホーシュ君か？

カン子「ツバメです。

シロウ「ほんとに驚く」ツバメ?! 何で、ツバメが出てくんた。

カン子「雨宿りさせて下さい。

シロウ「おいおい、猫じゃないのか？

カン子「ツバメです。

シロウ「ほんとに？

カン子「ほんとです。雨宿りを・・・

シロウ「・・・(カン子に) おいおい猫だろ。

カン子「ツバメだよ。ばさばさ。

シロウ「猫だつてば。

カン子「いんやツバメだ。

シロウ「強情なやつだな。いいかいあの話は、猫が出てきてカッコウが来て、それから狸

が来て、

カン子「ツバメだったよ。・・・どうか雨宿りを・・・

シロウ「分かった。しょうがないな、分かったから、入れよ。

カン子「ありがとうございます。

シロウ「なにかみやげはないのか？

カン子「そんなものありません。

シロウ「トマトとか・・・

カン子「ありません。

シロウ「しょうがないな、ほんと猫が青いトマトを、

カン子「おや、王子様、セロをお弾きになるんですか。

シロウ「？セロは弾くが、僕は王子なんかじゃないよ。

カン子「そうですか。まだ雨もふつてますから、何か聞かせてください。

シロウ「冗談じゃない。もう帰れ帰れ。僕はいそがいんだ。

カン子「そう言わずに一曲。

シロウ「困ったやつだな。何が聞きたいんだ。

カン子「トロイメライなんかどうでしょう。

シロウ「トロイメライ？ロマンチックシューマン作曲のか？

カン子「そうです。

シロウ「よしよし、それでいいんだ。話がやつと元にもどってきた。よしよし、弾いてや

る、弾いてやるから、それを聞いたら帰ってくれよ。

カン子「(拍手)

シロウ「(トロイメライを弾く・・・弾き終わって)さあ、どうだもうこれでいいだろ。

カン子「はい、でも、今度は何だか音楽がおそわりたくなってきました。

シロウ「音楽だと。おまえたちのはその、ピーとかチーとか鳴くだけじゃないのか。

カン子「カッコウと啼きます。

シロウ「・・・あのな、ツバメがなんでカッコウと啼くんだ。

カン子「？えつと、そ、それは、ああ、カッコウの真似をしてです。

シロウ「なるほど。それで？

カン子「ですからけっこう難しいんです。

シロウ「そりやまあ、難しいだろうなあ。ツバメがカッコウの真似すんだもんな。

カン子「たとえば「かつこう」とこう啼くのと「カッコウ」とこう啼くのでは、聞いていてよほどちがうでしょう。

シロウ「ちがわないね。

カン子「では、あなたには分からないんです。わたしのなかまなら、カッコウと一万言ええば一万みんな違うんです。

シロウ「かつてだよ。そんなに分かっているのなら、何も俺のところへ来なくともいいじゃないか。

カン子「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。

シロウ「ドレミファもくそもあるもんか。

カン子「外国へ行く前にぜひ一度いるんです。

シロウ「外国もくそもあるもんか。いったいぜんたいお前らがどの外国へ行くっていうんだ。

カン子「エジプトです。ツバメは秋になるとみんなエジプトに帰ります。

シロウ「ややこしいやつだなお前は。

カン子「ですからどうしてもドレミファがいるんです。王子さまについて歌いますから、どうか弾いてみてください。

シロウ「俺は王子さまじゃないって言ってるだろ。

カン子「おねがいます。

シロウ「それじゃ、三べんだけ弾いてやるから、すんだらさつきと帰るんだぞ。

シロウ、ドレミファを弾いてみる。

カン子「ちがいます。ちがいます。そんなではないんです。

シロウ「うるさいやつだなあ。じゃあ、おまえ一度やってみてくれ。ツバメのカッコウのドレミファというややこしいのをやってみてくれ。

カン子「カッコー。

シロウ「なんだいそれは。それがツバメのカッコウのドレミファかい。おまえたちにはそれで、ドレミファもハラヒレホレハレも第六交響曲も同じなんだな。

カン子「それは違います。

シロウ「どうちがうんだい。

カン子「難しいのは、これをいくつもつづけたのがあるんです。

シロウ「つまりこうだろ。

シロウ、「カッコー」と続けて弾く。

カン子「そうです。そのとおり。（一緒になって「カッコー」と啼く）

シロウ「おい、もういいかげんにしろ。俺はいそがしいんだ。用事がすんだらさつきと帰ってくれ。ほらもう雨だつてあがつたぞ。

カン子「どうかもういつべんだけおねがいます。あなたのは、いいようだけど、どこかちがうんです。

シロウ「ざけんなよ、俺がお前に教わってるんじゃないんだぞ。俺はいそがしいんだ。明日もこいつで仕事があるんだ。それを明日までに仕上げておかなきゃならないんだ。

また楽長に叱られるじゃないか。

カン子「どうか、たつたもういつぺんです。

シロウ「しょうがないな。これつきりだぞ。

シロウ、「カッコウ」を弾く。カン子の燕は最初あわせて啼いていたが、もういとみえて、途中でやめる。シロウは次第に「カッコウ」に没頭してしまつて、ハツとわれに歸つた。

シロウ「ハッ。ええい、こんなばかなことをしていたら、俺は鳥になつてしまふ。ええい、もう出ていけ、出ていけ。

カン子の燕、大慌てで出ていつて窓ガラスを破つてしまふ。

シロウ「なんだ硝子に、ばかだなあ。もう来るなよ。バカヤロ―。

シロウ、また水をがぶがぶ飲むと、セロを弾く。

次の夜。

シロウ、相変わらずのセロ。

シロウ「まったくうまくいきやしない。鳥のまねなんかするんじゃない。今夜はもう何もこないだろうな。

と、また燕がやつてきてドアを叩く。

カン子「トントン、トントン。」

シロウ「だれだこんな真夜中に。狸なら狸汁にしてくつてしまうぞ。狸ならな。狸なら。カン子「私です。王子さま。帰りそこなったツバメです。」

シロウ「ツバメ？・・・狸だろ。」

カン子「ツバメです。」

シロウ「狸だつて。」

カン子「ツバメだもん。」

シロウ「しょうがないな。・・・まあ、いいや入ってこい。」

カン子「王子さま、飢えている野ネズミの親子をみつけました。」

シロウ「そいで？」

カン子「野ネズミの子供は死にそうです。」

シロウ「それが、俺とどういう関係があるんだ。俺はセロをやらなきゃならないんだ。今

日も今日とて楽長さんに怒鳴られたんだ。まったくお前のようなギクシャクのセロは、みたことがないと、叱られたんだ。おかげで俺は楽団のみんなの笑いものだ。」

カン子「野ネズミの親子が死にそうなんですが。」

シロウ「だから、そんなことは、俺と何の関係もないことだと言ってるだろう。」

カン子「野ネズミが・・・」

シロウ「分かった。わかったよ。ほれ（と、ポケットからパンを出して）これでも持つていつてやれ。」

カン子「ありがとうございます。これで野ネズミは助かります。」

シロウ「受け取ったら、早く帰れ。」

カン子「はい。」

シロウ「もう来るなよ。」

カン子「では、いつてまいります。」

シロウ「もう来るな。バカヤロー。」

カン子の燕、行ってしまった。

シロウ「やれやれ、おかげで明日も怒鳴られるんだ。

シロウ、またガブガブと水を飲んで、気違いのようにセロを弾く。

次の夜。

シロウ、もう憔悴した顔でセロを弾いている。

シロウ「水を飲むと」ああ、駄目だ。俺には、才能というやつが何もないんだ。才能のないやつが努力してもうまくなれっこあるもんか。今夜はもう誰も来ないだろうな。もし今夜来たら、今夜こそ叩きだしてやる。

と、カン子の燕がやってくる。

カン子「とんとん、とんとん。」

シロウ「なんだ、また勘違いしているツバメか？」

カン子「王子さま、野ネズミの親子にはちゃんとパンをやってまいりました。

シロウ「そうかそれは喜んでいただろう。ところで今夜は何の用だ？」

カン子「はい。東のほうに貧しい狐の親子をみつけました。

シロウ「まったくお前というやつは、俺をてつきりワイルドの『幸福の王子』とまぜこぜにしてやがるな。それで、その不幸な狐の親子に何かもっていつてやるのかい。」

カン子「はい。もう私はエジプトに行くのはあきらめました。

シロウ「持つていつてやつてもよいが、もう俺にはやるものは何もないよ。お前が毎晩やつてきては、俺のセロの稽古のじゃまをして、いろんなものを持つていつてしまうので、楽長には辛くあたられるし、おまけにもう俺はすかんぴんだ。人にめぐんでやるものなんてもう一つも残つてやいやしないよ。

カン子「まだ、セロが残っているではありませんか。

シロウ「セロ！これを持つていく気か。冗談言うな、これは俺の命の次に大切なものだ。これは駄目だ。

カン子「その命が危ないものがあるのです。

シロウ「ばかを言うなよ。これを持つていかれたら、俺は明日から何をして暮らせばいいんだ。まだ俺の首はつながっているんだ。楽長から罵られながらも、なんとか凌いでいるんだ。俺に死ねというのか。

カン子「私だつてもうエジプトには行けませんから、ここで死ななければなりません。

シロウ「そんなことは俺の知ったこつちやないよ。

カン子「どうかこれが最後ですから。

シロウ「明日は大事な演奏会なんだぞ。

カン子「明日になったら狐の親子は死ぬでしょう。あさつてになったら、私が今度は生きてはいません。

シロウ「ええい、よし、分かった分かった。仕方ないやつだな。セロをやるよ。これを持つていつてお金にかえて、狐の親子でも狸でも何でも助けてやりな。

カン子「はい、ではいつてまいります。今度はここに帰つてこれるかどうかわかりませんので、ここでさようならにします。さ・よ・う・な・ら。

シロウ「はいはい。さようなら。

カン子の燕、セロを抱えて飛んでいった。

シロウ「ふざけた鳥だなまつたく。しかし、俺だつてふざけてるよ。なけなしのセロをやつちまつたんだからな。・・・ああ、もう何にもなくなつちまつた。セロ弾きにセロが無くなつたら、もうおしまいだな。・・・しかし、・・・なんかせいせいしたな。おかしなもんだ、今のいままでしがみついていたものが無くなつてみると、何だか気持ちスツキリしたよ。変だな、セロがなくなつたつて、セロくらい弾けるような、そんな気がしてきたぜ。そうか、ずいぶん俺はくたびれていたんだ。毎晩々餓鬼のようになってセロと格闘していたものな。・・・そうだ。俺はきつと、ずいぶんくたびれていたんだ。・・・

シロウ、座るとセロを弾く音を口で真似て出してみる。

シロウ「・・・へへへ。ほんとうに、なんだか、今度はうまく弾けそうな、そんな気がしてきたぜ。

溶暗して、スポットがシロウのゴーシュをとらえる。
影の声、楽長らしい。

——何だつて！セロが無い！どうするんだ。君の部分はどうするんだ。演奏会はどうするんだ。観客がまつているんだぞ。

シロウ「セロを弾く真似つてのはどうでしょう。

——気でも狂つたのか。

シロウ「とにかくやってみます。昔、『嵐を呼ぶ男』でユウちゃんがドラムのスティックを落として、そいで追い詰められて歌をうたつたでしょ。あれ、好きだったから、あ

んなふうにやってみます。

シロウ座ると、セロをもっている格好をして、まずトロイメライを口でやってみる。

それから、カッコーとやってみる。そして歌いはじめる。

シロウ「♪ 空や森や炎や草や 水や風や祭や歌や 街や砂や月夜や夢や

たぐさんの たぐさんの ひとつの 糸で

いっしょに編まれている私は小さな手鞠です

宇宙がひとつであり たぐさんのひとつであり ひとつのたぐさんであり

たぐさんとひとつがおなじであるという それとおなじ手鞠です

私は小さな巨きな手鞠です

だから、だから、つばめのかっこう、あの晩はすまなかったな。俺はおこったんじゃない。なかつたんだ。

ベートーベンの第六交響曲『田園』が流れてきて・・・

溶暗。

明るくなつて、シロウ、お辞儀して立っている。カン子も出てきて、一礼。

ややあつて狐たちの拍手。・・・次第に大きく

コンザブローが黍の団子を皿にのつけて登場。

コンザブロー「とてもステキでしたね。とてもよかったです。

シロウ・カン子「ありがとうございます。

コンザブロー「それではみなさん、少し休憩をいたしましょう。

狐たち欠伸をしたり伸びをしたり、ざわざわと。

コンザブロー「あなた方も、黍の団子を召し上がりなさい。(差し出す)

シロウ・カン子「はい。

と、何処からか風の声。

——狐の団子は兎(うさ)の糞。狐の団子は兎(うさ)の糞。・・・

シロウとカン子、皿に伸ばした手が止まる。

顔を見合わせる二人。シンとして見守る狐たち。シロウとカン子皿の黍団子を手にとって食べた。

シロウ「美味しい。

カン子「美味しい。

皿ごと持つて席に着く。

コンザブロー「さてみなさん。次はいよいよケルルン博士の特別講義です。ケルルン博士は私たち狐少年学校の名誉教授です。みなさんのお兄さんも、そのまたお兄さんも、みいんなケルルン博士に教えていただいたのです。ではケルルン博士、お願いします。

ケルルン博士、演壇に立つとお辞儀した。
拍手。

ケルルン博士「ケルルンです。この一年、みなさんは森でいろいろなことを学んできました。私がここでお話することよりも、みなさんが一年かけて森で学んだことの方が大切なのです。さてその森は今宵とても美しい月の光につつまれています。この月のあかるさをてのひらで受けてみましょう。（そうした）

狐たちも月の光を掌に受ける。

ケルルン博士「（掌を見て）ここにすべてがあるのです。このてのひらの上に宇宙があります。空間と時間と物質とそうして私たちの心さへも。

狐5「先生、僕には何も見えません。

ケルルン博士「よく見つけてもらんなさい。

狐5「あ、見えた。手の皺が見えた。

ケルルン博士「コン松さん、あなたアホね。

狐5「すんましえーん。

ケルルン博士「よろしい。アホもまた存在するのです。

狐5「ありがとうございます。

ケルルン博士「私たちだってまだまだアホです。科学は未だ万能ではありません。科学で解明できないことがまだたくさんあるのです。でも世界中の科学者たちは努力しています。では科学は何を努力しているのでしょうか。そもそも科学とはいったい何でしょう。

狐4「科学はロケットを飛ばします。

ケルルン博士「それから？

狐6「科学は電気を起こします。

ケルン博士「それから？

狐7「科学は病気を治します。

ケルン博士「それから、それから？

狐8「科学はビルを建築します。

ケルン博士「いいえ、科学とはほんとうはそういうものではありません。

狐4「では博士、科学とは何ですか？

ケルン博士「科学とは神の心を知ろうとする学問です。ですから科学はとても大きな疑問符です。巨大なクエスチョンマークです。この世界のことを、この宇宙のことを知ろうとする姿勢は、神の心を知ろうという姿勢なのです。では、科学は何をその力として使いますか？

狐4「数学です。

狐6「化学です。

狐7「医学です。

狐8「工学です。

ケルン博士「いいえ、ほんとうはそうではありません。それらは発明されたものでしかありません。

狐4「では博士、科学の力とは何ですか？

ケルン博士「それは想像力です。想像力こそ科学の力です。それは翼です。それは澄んだ瞳です。どこまでも高く飛ぼうとする翼です。どこまでも遠くを見ようとする瞳です。そしてそれは邪悪なモノをなぎたおす一本の剣です。神の心に近づく、それゆえに科学は感動であるはずです。それがもたらす知識もまた感銘を与えずにはおかないでしょう。したがって、感動なき科学、感銘なき知識は贗物でしかありません。

さあ、もう一度てのひらの月のあかりをぐらんない。それを微積分してぐらんない。微分していくと、私たちは素粒子をそこに見ることになります。積分していくと

私たちはそこに四次元の大宇宙を見ることができます。素粒子、見えますか？

狐5 「あ、見えた。

狐たち 「(ほんとう?)」

狐5 「と、思ったら、ハナクソだった。

ケルルン博士 「光の素粒子をフォトンといいます。

狐たち 「フォコン。

ケルルン博士 「いいえ、フォトンです。

狐4 「博士、素粒子というのは粒粒なんですか。

ケルルン博士 「粒粒でもあります。でもというのは、素粒子というのはふつう私たちが考
えるような豆やら米やらの粒とはちよつと違うのです。時にはそれは波動、つまり波
のようでもあるのです。また最新の物理学ではそれは一つの振動ではないかなども
いわれています。

狐4 「素粒子、波なんですか。

ケルルン博士 「ええ、そうです。(狐1と2に) あなたとあなた、ここに立ちなさい。そ
うして両手で大きな輪つかを作ってください。

狐1と2 そうした。

ケルルン博士 「(狐3に) あなたここに立ちなさい。(狐1と2の後ろに立たせた) さて(狐

4に) あなたは素粒子です。

狐4 「コンパです。

ケルルン博士 「コンパさん、あのコン吉さんとコン助さんの手の輪をくぐってコン太さん
のところまで行けますか？

狐4 「はい、行けます。どっちか、好きなほうをくぐればいいんですか？

ケルルン博士「いいえ、同時にくぐるのです。

狐4「ええ！それは無理だ。だって僕、身体をふたつに分けなきゃなんない。

ケルルン博士「素粒子というのは、この世で一番小さな粒子です。ですからそれを二つに分かつことは不可能なのです。でも、実験では、素粒子はちゃんとあの二つの輪を同時にくぐってコン太さんのところまで行くんですよ。ですから、もし素粒子が波であるならそれは可能でしょ。

狐4「ああ、そうか。

ケルルン博士「素粒子が波でもあるという理由が分かりましたね。

狐たち「はい。

狐5「ざぶぶーん。（波の真似をして狐1と2の輪をくぐろうとする）センセ、波なのにくぐれません。

ケルルン博士「はい。あなたとは、また後でお話ししましょう。

狐4「では、振動というのはどういうことですか？

ケルルン博士「先程お芝居にセロが出てきましたね。セロの弦が振動するのをみなさんは見ましたね。セロは弦を振動させて音を出していました。ですから簡単に言うと、弦の形をした素粒子を思い浮かべればよいのです。素粒子の反応はそうするとすべて振動によって起こるハーモニーということになります。ハーモニーによって宇宙が造られているという考え方です。

狐4「うわあすごい。僕たち音楽なのか。

ケルルン博士「さあ、座って。さて、またあのひらの月の光を見てみましょう。このフォトンという素粒子は互いにぶつかっても、ゆるやかな反応しかしめません。もし、フォトンが互いにぶつかって大きなエネルギーを発したりするならば、私たちは水面に反射するキラキラとした光や、木もれ日や、堅雪の輝きも見られないでしょう。フォトンはずいぶんとソフトな素粒子なのです。しかし素粒子はソフトなだけではありま

せん。私たちはアインシュタインのあの公式を学びました。エネルギーは質量と光速の平方を乗算することによって得られるというやつです。 $E = mc^2$ です。これはとても小さな粒子を反応させることによってとてもないエネルギーを取り出せることを言っています。この月のあかるさも素粒子のなせるわざなら、一瞬に何も彼も焼き尽くしてしまこともまた素粒子のなせるわざなのです。私たちはですから科学をハッキリと正しく見つめる努力を怠ってはなりません。・・・

さて、素粒子というモノは、いま述べたようにちよつと常識では考えにくいものです。それらは、色もなく、温度もなく、固いとか柔らかいとか、そういう性質もありません。おまけに、そこにある素粒子が、次に何処へ動くかを測定することはできないのです。その位置を測定すると速度が分からなくなり、速度を測定すると位置が分からなくなることを発見したのはハイゼンベルクでした。

狐7「博士、素粒子には、重さはあるのですか？

ケルルン博士「あります。

狐7「じゃあ、重力があるんだ。

ケルルン博士「いいえ、素粒子に働く力は重力ではないのです。確かに引き合ったり反発したりするのですが、この力が何なのか、まだよく分かってはいません。私たちはそれを弱い相互作用とか強い相互作用というふうに呼んでいます。それから、重さのない素粒子だつてあるのです。この月のあかりには重さはありません。フォトンの質量はゼロです。ニュートリノと呼ばれている素粒子は重さが無いばかりか、磁力にも、重力にも影響をうけないのです。ニュートリノというのは宇宙から降ってきて、いま、この瞬間にも、あなた方や私や、この森や地球をシャワーのように通過しています。そのうちの一個が百億分の一の確率で他の素粒子と正面衝突をするとき、はじめてその姿を表します。それから、ニュートリノには物質的な時間さえありません。さて、では、それら素粒子は何のためにあるのでしょうか。・・・分かりますか？

狐8「えー？、いろんな物質を作るためにあるんじゃないんですか？

ケルルン博士「実は、そうではありません。素粒子はほんとうは存在することに理由がないのです。目的があつて存在しているわけではないのです。つまり、これこれこういうものを作るために、これこれこういう素粒子が必要だから、存在するのではなく、たまたまそういう素粒子があつたから、たまたま私たちが出来ただけなのです。

狐8「ええ、じゃあ、ぼくらはタマタマなんですか。

ケルルン博士「でも、ひょつとすると、そうではないかも知れないという、物理学者もいます。つまり、何か、そこには秩序のようなものがあるのではないかと、考えている人もいます。しかし、この宇宙の、この世界のこの森のなにもかもが、素粒子によってできていることに間違いはありません。目的も理由もなく、物質としての属性すら欠いているほんの小さな物質が、私たちのような全てをつくつたのです。そう考えると、この宇宙というのはひとつの大きな容器なのではなく、あたかもひとつのおおきな思想のような感じさえします。・・時間がきたようです。このてのひらの月のあかさを積分して宇宙の構造を勉強するのは、また次の機会にしましょう。終わりました。

お辞儀した。

拍手。

ケルルン博士は席に着いた。

カン子「難しい話だったね。

シロウ「うん。狐の学校は進んでいるんだな。

カン子「大人になつたら分かるのかな。

ケルルン博士「いいえ。大人になつたら、人はこういうことを忘れるんですよ。ですから、

今のうちに、しつかりこの月のあかるさを見ておきなさい。

シロウ・カン子「はい。」

コンザブローが出てきた。

コンザブロー「みなさん、これで狐少年学校の学校祭はおしまいです。この学校祭をもつて、狐少年学校の、森の終業式にしたいと思います。・・・今夜みなさんは深く心に留めなければなりません。この記念すべき日に出席してください。賢い、少しも酔わない人間のお子さんが、狐のこしらえた団子を食べてください。うことです。」

そこでみなさんは、これから大人になつても、うそをつかず、人をそねまず、私も狐の今までの悪い評判をすっかりなくしてしまおうと思います。・・・シロウさん、カン子さん、これは今夜の記念とお礼に狐少年学校から送るものです。（トマトを出した）

カン子「あ、トマトだ。」

シロウ「トマトだね。」

コンザブロー「どうぞ受け取ってください。」

シロウ・カン子「ありがとうございます。」

コンザブロー「私どもはこれから故郷に帰ります。」

シロウ「故郷？」

カン子「狐の故郷って何処？」

コンザブロー「（空をゆびさした）あそこです。あの赤く輝く天体、火星です。私たちは

あの火星の運河に帰るのです。」

シロウもカン子も狐たちも、シンとして火星を見つめる。

コンザブロー「それでは人のシロウさんカン子さん、さようなら。
狐たち「さようなら。」

狐たちそれぞれブーンと飛んで去っていく。ケルン博士も去り、コンザブローもシロウとカン子に一札すると去った。トマトを持ってボンヤリ立っているシロウとカン子。

と、森はまた序章のような吹雪につつまれた。

吹雪はやがて、おさまって・・・何処からか声がする

「こんなところに兄弟ふたりして、吹雪を避けておったのか。

「駄目だ。兄のほうは何とかとりとめたが、妹のほうは、駄目だ。

「可哀そうにのう・・・

「これは何じや？何か、手に持っておる。

「トマトじゃな。

「トマト？・・・どうしてこんなものを？

「さあ、・・・

カン子「お兄ちゃん、

シロウ「え？

カン子「みんな行っちゃったよ。

シロウ「うん。行っちゃったね。

カン子「やっぱりこれは、狐に化かされたんだろうか。

シロウ「そうだろうか。

カン子「化かされたんだね。

シロウ「(トマトを見せて) きっとそうじゃないさ。

カン子「(トマトを出して) ああ、きっとそうじゃないね。

シロウ「うん。

ふたり、どちらからともなく空を見上げる。

カン子「あ、火星だ。

シロウ「ああ、火星だ。あそこにみんな帰って行つたんだ。

カン子「そうだね。きっとそうだ。

シロウ「あそこに火星がある。．．ここにトマトがある。

カン子「あそこに火星がある。．．ここにトマトがある。

シロウ・カン子「あそこに火星がある！ここにトマトがある！．．ばんざーい！バンザーイ！．．．

ふたり、トマトを差し出して、火星を見ている。

何処からか、冬の終わりを告げ、春の近いことを囁くようなワルツが聞こえてきた。

1989.6.21

北村 想

・作中用いました方言は出鱈目です。

・宮沢賢治『雪渡り』『注文の多い料理店』『ゼロ弾きゴースト』『ひかりの素足』を換骨奪胎、『いま吉本隆明25時』（弓立社）より井上英一氏講演を参考、いたしました。あしからず御了承、お許しのほどを。